

## 敬和学園大学の歴史（その3）

北 垣 宗 治

### 7. 1989年秋の陣

敬和学園大学設置のための第一次申請書が文部省によって受理され、準備室がますます活気付いてくると、その影響は近隣の空気の中に早くも感得できるようになった。大学校地に隣接した新発田市新栄町、舟入町の地価が徐々に上昇し始めたのである。当時舟入町等で宅地分譲が行われており、坪単価 15万円くらいで入手できたが、その上昇機運には不安と不気味さを覚えざるをえなかった。学長予定者以外に 31人の教員が就任する筈であるが、新潟市を含む通勤圏内に家を持たない教員は 20人ほどいた。新発田市からは敬和学園大学に着任する先生の中に希望者があれば、優先的に土地を斡旋するという申し出があった。場所は新発田川の西側の、消防署に近いあたりであった。しかし教員予定者に声をかけてみたが、その土地を希望する人は一人も現れなかった。大学の設置がまだ本当には決まっていない段階で、教員予定者が土地を買うなどは、やはり考えられないことであった。

新発田市大手町1丁目の目抜き通りに 11階建ての大型分譲マンション「ダイヤパレス大手町」が建設中であった。9月下旬に完成予定とのことで、配布された資料で分譲価格を調べ、就任予定の先生たちに参考として知らせた。1DK（2F）で 1,060万円、2LDK（5F）で 1,960万円、3LDK（8F）で 2,150万円、4LDK（11F）で 3,390万円、だという。このマンションは2004年現在でなお、新発田市内で最高層ビルであり、敬和学園大学の教職員でここに住んだ人、今なお住んでいる人がいる。マンションからは白雪に輝く飯豊山や二王子山が眺められ、また佐渡に沈む夕日の姿も壮観である。

すでに述べたように、敬和学園大学の校舎の建築については、設計監督をヴォーリズ設計事務所、施工を新発田建設、伊藤組、岩村組、石井組のジョイントとすることは決まったが、敬和学園大学設立準備室として決めなくてはならないことがたくさんあった。例えば冬期の暖房設備を電気にするか、それともガスにするのか？ 教室や食堂に冷房を設けるかどうか？ 学内放送設備を作るかどうか？ 衛生放送受信の設備を置くかどうか？ どの程度

の規模の語学教室 (Language Laboratory) を作るか？ コンピューター教室に何台のパソコンを設置するか？ その機種として何を選ぶか？ 買い取りとするのか、リースでいくのか？ 図書館内に Audio-Visual 用の器機を設置するかどうか？ 研究室棟の警備システムをどのようなものとするか？ 教員は研究室を夜何時まで使うことができるようにするのか？ 学内の電話システムをどのようなものにするか？ 教員の研究個室に水が出るようにするかどうか？ そのような問題を決めるには予算の裏付けが必要であり、簡単ではなかった。図書館系の松原洋子が大津の自宅で使っていた電子オルガン（テクニトーン）を大学に寄附することを申し出た。大学は感謝をもってこれを受け入れ、それをチャペルの時間に使用することになっている大教室に置くことにした。

1989年9月には上記の諸問題を含めて、ヴォーリス設計事務所との打ち合わせが始まった。ヴォーリスからは東京事務所長の片桐郁夫氏、副所長の佐藤良一氏らが時折設置準備室を訪れて打ち合わせをした。何人の学生が同時に利用できる食堂とするのかによって、厨房の規模を決める必要があった。佐藤氏は、400人の利用する食堂の厨房設備として500万円ないし600万円を提示してきた。準備室は、語学教室とコンピューター教室にはそれぞれ器材室が必要であること、湿気等に注意しなくてはならないこと等を学んだ。ヴォーリス事務所は9月中に基本設計を完了し、10月、11月に実施設計（建築業者にわたすための設計）を終わる予定であることを表明した。敬和側にはそろそろ建物の名前を考えて頂きたい、との示唆があった。

建物の名前は理事長、理事、その他関係者に提案を求めるべきであったが、結局学長予定者によい案があれば、それでいいのではないか、ということになり、北垣は大学を誘致して下さった地方自治体のご恩を末永く忘れないために、新発田市側にある教室棟Ⅱを「新発田館」、聖籠町側にある管理棟を「聖籠館」、中央の教室棟Ⅰを神の栄光を表すことを願って「栄光館」、研究室棟には真理を尋ね求める場となることを祈って「尋真館」、食堂には、後述することになるアメリカにおける姉妹校 Northwestern College の所在地にちなんで「オレンジ・ホール」とした。なお、栄光館と尋真館は、北垣の母校である同志社の建物の名前から借用したことを断っておく。

この頃、新発田市との連絡、打ち合わせも頻繁に行われ、そのお膳立ては相馬六次長が担当した。建築工事の施工業者について、準備室は一切新発田

市の指導に従った。大学の校医を誰にするかという問題については、新発田市を通して医師会に要請し、医師会の推薦によって牧野医院にお願いすることになった。食堂の経営は新発田市の肝いりで新発田市カルチャー・センターで食堂を経営している蒲城（ほじょう）に委託することになった。新発田市は通学路の両側にケヤキを植え、それが将来立派な並木道となることを期待した。教員の宿舎についても、新発田市はできるだけの便宜をはかることを約束したが、ふたを開けてみると、新発田に住みたい教員は少なく、せっかくの市の好意は活かせなかった。むしろ聖籠町の斡旋により、四人の子どもを連れて佐賀から赴任してくる山田耕太氏が会社の社宅を利用させてもらうことになった。

「大学設置・学校法人審議会」のうち、大学設置分科会による説明聴取は10月23日に、文部省の隣の教育会館で行われ、敬和から後宮理事長、北垣学長予定者、仙沢準備室長、春名理事ら、6人が出席した。分科会の主査は新野幸次郎・神戸大学長。後宮理事長の挨拶に続き、北垣学長予定者が敬和学園大学を創設することの必要性和その意義、また学生確保については十分自信を持っていること等について約20分間説明した。それに対して新野主査から、前年の失敗に終わった計画と本年の計画との相違点について質問があった。北垣は、前年指摘されたいくつかの欠点はすべて克服し、カリキュラムの面でも環日本海文化研究を柱の一つに据えるなど、新味を加えたこと、全学生にキリスト教学を必修させ、教授である宗教主任を配置し、チャペル・アワーを設けるなどして、宗教教育にも力を注ぐつもりであることを強調した。

次に副査の福田敏一教授（明治学院大学次期学長）から、主として国際文化学科のカリキュラムについて手厳しい批判が展開された。①このカリキュラムに見られる英米中心主義は異様である。イスラム圏や、第三世界の問題にどう対処するつもりなのか？ アジアの思想への対応はどうしようというのか？ ②科目の内容にダブる部分が目立つ。「欧米文化論」「欧米文化史」「ヨーロッパ研究」等が科目として上がっているが、内容をどのように調整・区別していくのか？ ③経済学系の諸科目はstaticであり、いたずらに過去に拘泥しすぎている。開発の視点が欠如しており、チャレンジの精神がうかがえず、これでは21世紀向きのカリキュラムといえない。福田教授の批判を要約すると以上のようなになる。北垣にとって福田教授の批判は至極もつともであったから、これらの指摘を深刻に受け止め、できるだけカリキュラ

ムを手直ししていきたい、と答えた。英語英米文学科のカリキュラムについては、「ドイツ文学史」「フランス文学史」「ロシア文学史」と、文学史をやたらに並べる杜撰さが指摘された。

幸いにも北垣にとって福田教授は初対面でなかった。ちょうどその前年に、British Council Scholars の1955年、1956年英国留学組の同窓会が東京で開かれ、北垣はその席で、留学では1年後輩にあたる福田に会っていたこともあって、北垣の耳に福田の批判は痛いけれど悪意のあるものでなく、本当の意味での親切として響いたのであった。のちほど文部省の板東久美子課長補佐に相談すると、福田教授に直接会って、助言を受けることは差し支えないということであったので、北垣は日を改めて明治学院大学に福田を訪問した。福田はざっくばらんにいろいろな示唆を与えた。必要な人事については、イスラム圏の専門家ならば国際大学によい先生がいるし、東南アジアの専門家ならばアジア経済研究所等に相談するのがよからう、ということであった。

その後文部省から連絡が入り、第一次判定に関する留意事項があるので、受け取りに来るようにと日時を指定してきた。文部省において、学長予定者に書面で示された「留意事項」は次のようなもので、一般論が抽象的に示されているにすぎなかった。「1. 高等教育機関としての管理運営体制について検討すること。 2. 国際文化学科については、設置趣旨に即し、教育課程について検討するとともに、教員組織を充実すること。」 加えて、専門委員会の意見として、「口頭による留意事項」が示されたが、これは具体的な指摘で、大いに参考になった。ただし英語英米文学科については留意事項がなく、すべて国際文化学科に関わるものであった。「1. 宗教思想と比較文化の内容が重複しているのではないか。2. 比較文化についてはフィールドワークに基づいた実証的な講義を入れることが望ましい。3. 英語の原書講読が必要である。4. カリキュラムにおいて文学史関係のものが突出しており、文学と文化との連関が曖昧である。5. 経済学関係の諸科目の説明が不適切である。」 北垣はこれらの具体的な留意事項を十分に検討した上で、修正、微調整を行い、教員人事でまだ決まっていない部分に新しい工夫を加えることにした。

学校法人分科会によるヒアリングは 11月1日に行われ、敬和から後宮理事長、飯監事（前霊南坂教会牧師）、北垣学長予定者、仙沢室長、春名理事を含む8人が出席した。主査は前年と同じく北海学園の森本正夫理事長だった

が、前年よりはおだやかに、学生確保の問題については大丈夫かと質問した。これに対して敬和側は、ここ3か月で新潟県下の佐渡、長岡、柏崎方面の諸高校を訪問し、合計 825人の受験生は確実にあること、将来とも着実な大学経営をするつもりであり、創意と工夫によって魅力ある大学の形成をはかっていく決意であることを強調した。小さな点について指摘がなされたが、前年のような致命的な問題の指摘はなく、波乱なく説明聴取を終了することができた。

この頃教員予定者に手紙を送り、敬和学園大学図書館が備えるべき学術雑誌をリストしてもらい、一人につき2種類の提案を求めることにして、52種類の定期刊行物を決定し、紀伊國屋書店を通して発注の手続きを取り始めた。

12月中旬に文部省から届いた通知は、敬和学園大学設置の申請を「不可とせず」というもので、この二重否定的表現は申請業務が峠を越えたことを意味した。残るは校舎の建築と、教員人事の本格的な審査である。12月26日、専任教員予定者の初顔合わせ会を実施した。この日は12月下旬とは思えないほどよく晴れわたり、ドライブ日和であった。31人の専任教員予定者のうち23人が参加。海の彼方米国カリフォルニアから延原時行氏が、北海道から田原嗣郎氏が、そして九州の佐賀から山田耕太氏が駆けつけ、北垣が新潟からバスガイドをつとめて新発田・聖籠にまたがる、まだ何も建っていない校地に案内した。新潟東映ホテルで行われた初顔合わせ会は仙沢準備室長の司会のもとに進行した。まず賛美歌 312「いつくしみ深き」を歌い、後宮理事長が聖書を朗読し、祈祷を捧げた。そのあと理事長、学長予定者の挨拶、常任理事や設立準備室職員、高校長ならびに事務長が紹介されたあと、教員予定者が一人ひとり自己紹介した。学長予定者が資料に基づいて今後の予定、特に大学設置分科会の専門委員会による教員審査について説明し、質疑応答の時を持った。会は和気藹藹たる雰囲気の中に進行し、早くも敬和学園大学のスピリットらしいものが生まれた感じがした。

なお、新発田市と聖籠町から出向して、1年間にわたり準備室の事務を手伝ってきた今村正博、神田礼輔の両氏は、1989年の末日をもって出向を終わり、それぞれ新発田市役所、聖籠町役場に帰っていった。両氏は大学の産みの苦しみを共にした同志として記憶される。両氏は現在市、町の主要な地位にあり、本学の成長を見守っている。

## 8. ファカルティの充実をめざして

1990年が明けると半年後に迫った第二次申請をめざし、書類作りに拍車がかかった。その中心は、就任予定の先生たちの履歴書、業績書を指定の様式に即してととのえていくことである。すでに前号において、就任予定者の何人かについて触れ、説明を加えた。どの先生にも何らかの縁、ないしきっかけがあって、敬和の先生となる決意をされた筈である。一人ひとりについて、どのような縁ないしきっかけから敬和に奉職されるようになったのか、北垣はそのすべてを知っていたわけではないが、申請の最終段階で学長予定者としてどのような問題に直面したのかについて、述べておきたい。

野本森萬・初代学長予定者は敬和のファカルティとして、新潟大学の同僚であった経済学のK教授と、日本文学のI教授、東京のある私立大学のM教授、それに英語担当者としてイギリス人のR博士を確保していた。日本人の3人はそれぞれに大物であり、ただちに学部長の仕事を依頼できるほどの人たちだった。このうちI教授は、野本教授が学長予定者を降した機会に、野本に殉じるかたちで、敬和には来ないという意思を表明した。そのため日本文学はI教授の教え子である若い先生が非常勤講師として担当することになり、専任教員枠は他の分野で活用することになった。ところがK教授とM教授とR博士からはそのような意思表示がなかったので、北垣は他の先生たちと同様に、その3人にも科目を割り当てて時間割を作っていた。つまり1989年7月末の第一次申請の書類には、1991年度から1994年度に渉る4年間の科目表と時間割が入っていたのである。4年間にわたる科目表と、つじつまの合うように4年分の時間割を作る作業は、北垣にとって膨大な時間と注意力を必要とする仕事であった。

東京のM教授には手紙を書いて、あらためて意思の確認をしたところ、できることなら、敬和への赴任は辞退させてほしい、ということであった。M氏が誰かに義理立てをして敬和への就任を一度は承諾したのであったことはあきらかだった。他方K教授の方は就任してくれそうでもありながら反応が消極的で、事務室泣かせのケースであった。そこでついに、北垣は仙沢室長とともに、当時K氏が務めていた埼玉県短期大学まで足を運び、直接に面会して意思を聞いた。K氏は夫人が新潟にまだ未練があるようなことを言っていたが、北垣が確答を迫った結果、敬和を断念すると答えた。3人目のR氏はモロッコの大学で教えていたので連絡が取りにくく、困らされた。しかしついに手紙で断ってきた。

大学の設置認可申請の場合、いったん申請書を提出したあと、人事を入れ替えるのは当然のことながらルール違反である。文部省の役人を納得させるのに大変な苦勞がいる。もちろん死亡の場合はやむをえないのだが、その他の場合として考えられるのは病気か、それに類することを理由にせざるを得ない。当時すでに69歳だったK教授は高齢を理由とすることができた。文部省はM氏については診断書の提出を求めた。日本の事情をよく知らないR氏には、まさに笑いたくなるような手紙を書いてもらい、その訳文を北垣が作って文部省に提出した。いわく、妻はモロッコの女性であり、寒い新潟の気候に耐えられそうもないとわかったので、敬和への就職を辞退します、悪しからず、云々。ふたをあけてみると、R氏は名古屋の某大学に就職していた。彼は敬和とふたまたをかけて、日本での就職運動をしていたのであった。

この間、北垣学長予定者の心をずっと占めていたのは福田歓一教授の指摘であった。敬和学園大学は21世紀を視野に入れた国際文化学科のカリキュラムを組まなくてはならない。そこで北垣は仙沢準備室長とともにまず東京のアジア経済研究所を訪問し、松本理事に会って、適当な人材をまわして頂けるよう要請した。松本氏は数日をおいて、所員の浅野幸穂氏を推薦してきた。浅野氏はフィリピンの政治・経済の専門家で、「国際経済論」や「第三世界論」を担当することになる。「国際関係論」で適当な人材を求め、北垣は大学基準協会の大学入試問題検討委員会で旧知だった中央大学の戸田修三教授を通して、スウェーデンに留学したことがある少壮の政治学者、塩屋保氏を紹介された。塩屋氏は国際関係論だけでなく、「平和学」という、まさしく21世紀むけの科目を担当することになる。また「国際政治論」には同志社大学から小野哲教授を迎えることができた。さらに「イスラム文化圏研究」には大和町の国際大学から、この分野でトップクラスの学者である黒田壽郎氏を非常勤講師として来てもらえるよう、手はずをととのえた。

北垣は学長予定者を引きうけて以来、敬和学園大学の英語教育を（南イリノイ大学新潟校を除く）県内大学で随一のものにすることに執念を燃やしてきた。その英語教育の中心を背負う筈の人は新潟の高校の先生であり、非常に優秀な人であったけれど、残念なことに大学で教えた経験がなかった。ここで躓くと敬和にはもうチャンスがなくなる、との予感から、北垣はついにその先生に会見を申し込んで事情を話し、降りていただいた。その先生は従容として北垣の説明を聞き、了承した。後任として、鶴見大学助教授の松崎

洋子さんを推薦したのは春名康範理事であった。しかも松崎さんは同志社大学英文学科における北垣の教え子であった。彼女は同志社卒業後、早稲田大学の大学院で修士を取り、さらにハワイ大学でも研鑽をつみ、英会話に堪能で、しかも社会で実務の経験のある得難い人材であった。英語学では、伊藤豊治教授の推薦により、新潟大学教育学部から孫野義夫教授を迎えることができた。孫野教授は顔の広い人で、のちに敬和学園大学に教職課程を作るときの人事に大きく貢献したことは忘れることができない。

英語教育の重要な一部は英会話能力の養成であるから、英語を母国語とする教員を複数確保することがどうしても必要だった。さいわい、関西の諸大学で非常勤講師の経験を積んでいた Allan Blondé 氏が北垣の友人を通して紹介され、北垣はある日ブロンド氏を京都から北陸線経由で7時間かけて新発田まで案内した。それは1990年6月のはじめであったが、ブロンド氏は飯豊山に残る白雪を見て感動し、敬和の仕事を引き受ける気になったという。また James Brown 氏も、開学2年目から英語英米文学科の助教授として加わることを了承した。夫人の Joy Williams さんの父上にあたる Philip Williams 教授は北垣の1950年代初期からの友人であり、同志社では同僚だった。

前号で紹介した北垣の「敬和学園大学のヴィジョン」は環日本海文化の研究を強調しているが、その方面の担当者を新たに探す必要があった。これについては慶応義塾大学につてを求めて、優秀な文化人類学者（民俗学）である神田より子さんが推薦されてきた。文化人類学では最初イギリスの女性の学者が引き受けていたが、彼女は比較的早くに就任辞退を表明してきていたので、トラブルはなかった。神田さんは「環日本海文化研究Ⅰ」として、民俗学的アプローチを加えつつ対岸ロシアの文化を紹介する。なお「環日本海文化研究Ⅱ」として、富山県教育委員会の藤田富士夫氏に、考古学的アプローチをお願いすることになった。

人事がとんとん拍子に進んだケースとして久島公夫氏の場合がある。久島氏は新潟大学の出身で、広島工業大学で保健体育を担当してきた。そろそろ両親が高齢化し、故郷の新潟に帰って孝養を尽くしたいという希望を抱いていたときに、敬和学園大学のことを聞き、敬和学園高校のモス校長を通して、保健体育の担当者を志願してきたのは、まさしく渡りに舟であった。久島氏の内定後、準備室はしばしば広島に電話して打ち合わせをした。久島氏は敬



和学園大学における体育実技の球技種目としてバレーボール、バスケットボール、テニス、バドミントンを提案し、これにピンポンを加えてもよい、とした。そして第一中学から譲りを受けた体育館はバドミントンに用い、バレーとバスケットは聖籠町の立派な体育館を使用させてもらうことにした。また、大学の校庭でサッカーができるようにしたいが、それにはフェンスをめぐらす必要があることを指摘した。

大学の出発にあたり、いま一つ重要な分野は、敬和でどのような情報教育をするかという問題だった。担当者としては長崎大学工学部助教授で、北垣の旧知で同志社大学の出身である安藤司文（工学）博士が決まっていた。どのくらいの規模のコンピューター教室にするのか、どの会社のどの機種を選ぶか等、情報教育の設備関係できめなくてはならない問題が山ほどあり、いちいち長崎と電話でやりとりした。安藤氏は長崎大学に行くまで、日立製作所の技師であり、ロボットの研究を経て人工知能の研究を押し進めており、普遍文法の研究に没頭していた。（安藤氏が着任するまでは、敬和学園高等学校の守屋秀洋教諭から高校での経験に基づき、コンピューター教室のアイディアについて、懇切な指導と助言を受けることができた。）

野本・初代学長予定者は理論物理学者だったから、一般教育科目の自然科学概論は自分で担当するつもりであったが、野本氏が来られなくなったため、自然科学の担当者を求める必要が生じた。長らく新潟大学で事務を担当してきた菊地次郎氏が、地学者であった津田禾粒学長に連絡を取り、北垣は新潟大学の学長室までうかがって、自然科学の担当者の推薦を要請した。津田学長は1991年3月で新潟大学を定年退職予定である理学部教授のリストを慎重に点検し、日を改めて、菅野浩教授を推薦してきた。生化学者である菅野教授は温厚な人格者で、敬和ではのちほど就職委員長として、また国際文化学科長としてリーダーシップを発揮した。

1990年9月6日に理事長、学長予定者らは文部省に出向き、林課長補佐から、判定カードに基づき、科目ごとに教員資格審査の判定を受けた。英語英米文学科の科目については、すべて申請通り可であった。ところが経済学専門委員会は、一般教育科目の「商学」と、国際文化学科の科目のうち四科目に関して「不可」を宣告した。すなわち「商学」「国際金融論」「情報システムB」担当のA氏と、「国際関係演習Ⅰ」「国際関係演習Ⅱ」の西沢昭夫氏とが「不可」であった。A氏は東大出身で長らく日本銀行に勤務してきた人で

あり、論文も多くあった。当時は神戸大学の助教授で、この人が不可になることは常識では考えられなかった。西沢氏は講義科目である「新企業家論」は「可」であったので、首がつながった。西沢氏は着想豊かでばりばり仕事ができ、のちには東北大学大学院からスカウトされるに至ったほどの人であるが、あのとき演習科目担当不可とされたことは、どのように考えても腑に落ちないことであった。(A氏は非常に落胆し、日本銀行もこのことで非常に驚いたということが複数のルートを通して北垣まで伝わってきた。A氏はのちに某私立大学の教授になったと聞いている。)

A氏の後任である「国際金融論」担当者は二か月以内に見つけて、申請しなおさなくてはならなかった。敬和学園大学が認可されるかされないかは、この、たった一人の人事にかかっていた。北垣はあらゆる手を使って後任探しに奔走したが、この問題は困難をきわめた。何人かの識者は、liberal arts education を実施しようとする敬和学園大学で、なぜ「国際金融論」が必要ですか、との疑問を発した。国際文化学科のカリキュラムに「国際金融論」を入れたのは、敬和への就任を途中で辞退したK教授だったのだが、この時点で科目を取消しにすることはもはやできなかった。ついに、やっとのことで、東京銀行出身の人と住友銀行出身の人が推薦されてきた。前者は大学で教えた経験があるが、業績は少なかった。後者は著書、訳書を含み業績はたくさんあるが、大学で教えた経験がなかった。北垣は悩んだ末、後者に賭けることにした。判定は可であった。大海宏教授である。西沢氏の担当予定だった演習科目は浅野、大海の両教授が二年間肩代わりすることで解決し、これで敬和学園大の科目と担当者の問題はすべて解決した。

## 9. ついに設置認可を得る

1990年3月28日の朝、敬和学園大学は新発田市と聖籠町にまたがる富塚三賀境の校地で校舎の起工式を挙行了。幸いに晴れ渡り、テントに紅白の幕を張りめぐらした式場には関係者約70人が参集した。式は春名康範牧師の司式のもとにキリスト教式にいとなまれ、松井愛美牧師は自ら十日町から車で運んだオルガンで奏楽者の役割をはたした。小渕康而牧師による聖書朗読、祈祷ののち、後宮俊夫理事長、新潟県知事(代理)、近寅彦新発田市長、長谷川榮作聖籠町長、設計業者として片桐郁夫ヴォーリス東京事務所長、施行業者代表として新発田建設の渡辺幸二郎社長による鍬入れが行われた。理事長の式辞のあと、高橋稔牧師の祝祷をもって起工式は終わった。そのあと、会場の一隅でささやかな祝賀会が開かれた。それはまた携帯電話というもの

が、出席したNTTの職員によってはじめて人々に披露された日でもあった。

その日から6日後の4月3日に、敬和学園大学設立準備室はそれまで1年2か月を過ごした中央町の産業会館の2階から、キャンパスの正門に近い位置（南側の調整池のあたり）に建てられた2階建ての仮設事務所に移転した。1階に事務室、2階に学長予定者の部屋と小さな会議室が設けられた。建設工事の進捗ぶりは毎日見ることもできた。競争入札の結果A工区を新発田建設が、B工区を岩村組が担当することになり、4月に入ると校舎建築の手始めとして杭打ちが始まった。長さ20メートルの中空のコンクリート円柱360本を打ち込むことになり、連日仮設事務書は振動した。しかしそれは、何という心地よい振動であったことか。

この頃新新バイパスが完成し、一日に二万台を超える車がひっきりなしに通るようになった。敬和学園大学の建築状況はバイパスを通る車からは手に取るようにわかり、その宣伝効果は抜群であった。受験生やその親たちから、入学試験についての問い合わせの電話がかかるようになった。

6月30日に第二次の大学設置認可申請書を文部省に提出した。前年同様、準備室が用意した書類の厳しいチェックがあり、部分的にカリキュラムの修正を行うなど、そのためにまた職員は一致協力して深夜に至るまで読み合わせ、練り直し等を行った。

敬和学園大学の校舎がこうして姿を現し始めてきたことは新潟県内に大きなインパクトを与えたとみえ、新潟市、長岡市、県央などに新たな私立大学設立の話がちらほら出始めた。あの敬和でさえ四年制大学を作れるのであれば、われわれだって、ということであったろう。ところで統計の示すところでは、1988年に、新潟県の18歳人口の大学進学率は19.3%で、全国最低であり、すでに4年間にもわたってその「汚名」を受けてきたのであった。ちなみに同年、全国1位は奈良県の42.3%、そして全国の平均は30.9%であった。そこで先の衆議院選挙の期間中にある代議士が新潟県にもっと大学を、という訴えをぶち、いくつかの大学設立計画が現われ始めたのである。準備室に大学設立計画についてアドバイスを求めてやってくる場所も出てきた。

敬和学園大学の校地は周囲が田圃であるため、これをキャンパスらしくするために、仙沢室長が音頭をとって、各方面から松や桜といった樹木をいた

だくキャンペーンを始めた。キャンパスに一年中、その季節季節の花が咲くようにするのが理想であった。植物学の大家で新潟教会会員である新潟大学の萩屋薫名誉教授はさまざまな種類の椿を寄贈された。監事の河村邦彦氏は職員の倉島謙氏とともに、そうした植物移植のさいには、献身的に労力を提供された。木を植えることはやがて、人を植えることに通じるものである。

県内の高等学校を訪問してまわることは学長予定者の重要な仕事だった。新発田市が無償で提供してくれたお古のステーションワゴンを有効に活用したのはこのときであった。校長や教頭、進路指導の先生に会って直接に話を聞くことは有益だったといえる。「阿賀北にできる初の四年制私立大学」ということで、大きな期待を心から表明してくれる校長先生もあったが、ほんものの大学は国立大学であって、私立大学には生徒をやりたくないことを言外におわす先生もあった。新発田市内に存在する六つの高校には推薦の枠を広くし、入りやすくするように努めた。佐渡にも大学の車を持って渡り、島内の高校をすべて訪問したのみならず、佐渡でも受験できるように便宜をはかった。ただし佐渡の高校生たちは、心理的には本州に渡って受験する方が本当に受験した気になるらしかった。

村上の三高校をはじめ、中条の二高校、新潟市内の十校あまりの高校、新津の二高校、五泉、村松、三条、長岡、柏崎、高田等の高校をも辞を低くして訪問した。もっとも強い関心を示したのは敬和学園高校で、これは大変な難しいことであった。北垣は入学定員200のうち、四分の一の50までは敬和学園高校に割当ててもよいと考えていた。結果は49人となったが、これは、1991年卒業生だけでなく、1990年卒業生であっても、校長の推薦さえあれば受け入れるという方針で行くことにしたことによる。元来1990年に敬和学園大学がスタートする計画であったから、それをあてにしていた生徒たちを裏切ってはならないための措置であった。

日一日と開学が迫ってきたので、9月には事務職員を公募したところ、108人の応募があった。大学の事務職員は魅力ある職種のように、敬和学園大学がその後公募するたびに百人を上回る応募者が集まるのが常である。この時には筆記試験で6人が欠席。教養と作文の筆記試験を課し、その成績に基づき数を限定して面接試験を行い、男女3人ずつ、合計6人を採用することにした。すなわち斎藤一浩、船岡芳晴、金子弘幸、内田真奈美、五来晶子、本田麻由の六氏である。新入生を迎え入れるための事務体制のお膳立てがこ

れでととのったことになる。

1990年秋には二つの分科会による現地視察が行われ、その都度後宮理事長は京都から新発田へ足を運んだ。9月13日には学校法人分科会による実地調査で、慶応義塾大学の松本三郎教授、日本たばこ産業株式会社の水野繁氏、そして文部省事務官の森重信氏の3人が調査に訪れた。松本教授は1970年代中期の学生運動がまだ激しかった頃、北垣が同志社大学学生部長で、松本氏が慶応の学生部長であり、互いに激励し合ってきた「同志」だった。また森氏は寄附行為の変更、予算や土地・建物関係ではほぼ一貫して敬和学園を相手にしてくれた人であった。視察のあとの注意は特になかった。10月11日には大学設置分科会から浜田陽太郎・立教大学長、行田良雄・神戸市外国語大学長、事務官の久賀勲雄氏と石井康雄氏の四氏がやってきた。この日も型どおりの視察があり、視察後に浜田主査から次のようなコメントがあった。「①基本線は整備されているが、なお細部にわたって努力されたい。公私の共同方式を取られたわけだが、大学の根幹にかかわることはしっかりと守るようにされたい。②入試は慎重に実施されたい。入学者をむやみにふやすと、教育がなおざりになるから、注意すべきである。③カリキュラムは専門委員からの注意もあり、かなり工夫されている。学生の履修方法を十分に検討してガイダンスをするように。④計画通りに整備して、来年4月開校に遺漏のないようにされたい。教員の不足で開講できない、といったことがないように。⑤図書費、研究費は増額する方向で検討されたい。」

新発田の市民の間に敬和学園大学への関心を高めてもらうために、北垣は学生時代の同級生で友人だった、俳優の二谷英明を新発田に招き、市民文化会館で英語の学習を主題とするコロキウムを開くことにした。つまり二谷と北垣が聴衆の前で対談するというプログラムである。当時まだ二谷の名声は相当のものであったし、特に中年の女性にファンが多かったので、11月6日にはかなりの聴衆を集めることができた。この二谷・北垣の対談は、敬和学園大学としてその後新発田市民に提供することになる文化講演シリーズの先駆けをなすイベントであった。

大学としての認可が下りない前から、敬和学園大学との教育研究上の提携をしようという外国の大学が現われた。一つは米国アイオワ州のNorthwestern Collegeであり、もう一つは中国東北部の長春師範学院である。

ノースウエスタン大学で国際プログラムの責任者だった Lyle VanderWerff教授は1989年の後半、恵泉女学園大学で研究休暇を送っていたが、敬和学園高校のモス校長から敬和学園大学の話聞き、ぜひ北垣学長予定者に会いたいと言い出した。手紙連絡の結果、2人が東京駅の銀の鈴の下で初めて会ったのは1989年12月1日のことであった。互いに自己紹介していくうちに、ヴァンダヴェルフ氏はスコットランドのエディンバラ大学で、北垣は同じくスコットランドのセント・アンドルーズ大学で学んだことがわかり、「スコットランド精神」が改めて2人に握手を促したのであった。ヴァンダヴェルフ教授は中東で宣教師をした経験もあり、しっかりとした福音主義に立つ、きわめて献身的な学者だった。教授はノースウエスタンと敬和の姉妹大学関係だけでなく、大学のあるアイオワ州オレンジ・シティと新発田市の姉妹都市関係の樹立も視野に入れて考えていた。帰国した教授からの強い勧めに基づき、大学設置認可の見通しがほぼついた段階で、近寅彦市長とも相談の上で、北垣と2人の市民代表（新発田ガスの田辺英夫常務と岩村卯一郎代議士の子息で秘書の岩村良一氏——現、新潟県会議員）がアイオワ州を訪問することになった。

3人は11月16日に成田を発ち、シアトル、ミネアポリスを経て Sioux City に飛んだ。スー・シティまでヴァンダヴェルフ教授の出迎えを受け、オレンジ・シティに入った。一日は大学見学、図書館、体育館を見、礼拝にも出席した。午前にはヴァンダヴェルフ教授の授業で「イエスとその王国」という話を聞き、午後は同教授の「イスラームの歴史と神学およびキリスト教の反応」という授業を聴いた。さらにフィリップ・パットン教授の「経済学・経営学」のクラスでは田辺氏が「新潟に進出したトイザラス」について話し、岩村氏は日本の政治の特質について語った。北垣が通訳し、学生からの元気な質問も飛び出した。夜には Bultman 学長邸で歓迎夕食会に臨み、そのあと、敬和学園大学とノースウエスタン大学の間で、両大学がキリスト教主義高等教育におけるパートナーであるとする盟約書に署名した。こうして両大学はこの11月19日から、姉妹大学の関係に入ったのである。すべてはヴァンダヴェルフ教授のお膳立てによるものだった。これにより、翌年7月から8月にかけてノースウエスタン大学で行われる Summer Institute に、敬和学園大学の学生が参加する機会が保証されたのであった。

翌日はオレンジ・シティの見学に宛てられた。市役所で Robert Dunlop

市長や、商工会議所の MaryLou VanderWel 女史と会見した。市の産業を代表する会社であるペイントの会社や、帽子の製造会社を訪問し、夜は市長による歓迎夕食会に出席した。オレンジ・シティは元来オランダ系の住民が建てた町であり、オランダ風の町並みを持つ通りもあり、オランダの民芸品を売っている。（このオレンジ・シティと新発田市が姉妹都市関係を結ぶのはこれより数年遅れたが、これまたヴァンダヴェルフ教授の積極的な働きかけによって実現した。）3人の代表団は11月21日に帰国した。この代表団の訪問中に新発田の市長選挙があり、近市長は見事四選を果たしたのであった。

長春師範学院との関係の橋渡しをしたのは新津市の新井清氏である。新井氏は長春師範学院で日本語を教えてきた人で、帰国するに際し、婁警予院長から、日本の適当な大学と姉妹大学になりたいので、紹介してほしいと頼まれていた。当時まだ新津市には大学がなかった。敬和学園大学のことを聞いて、北垣のところにその話をもたらししたのであった。婁院長は乗り気で、北垣との間にただちに文通が始まり、1991年4月の開学式には数人の代表団をもってぜひ出席したいという意向を表明してきた。

1990年12月21日、後宮理事長、北垣学長予定者、春名理事らは文部省に赴き、敬和学園大学の設置認可証を受け取った。思えば長い道のりだった。北垣はこの日晴れて「学長予定者」から「学長」となったが、まだ一人の学生もいない大学の学長にすぎなかった。この日全国で幾つかの新設大学が誕生した。敬和もいよいよ入学試験の準備に突入することになった。12月25日、クリスマスの日に教員予定者たちは一年ぶりに大学に集まり、完成ま近の校舎を視察した。そして研究室棟である尋真館を見たのち、年令順にしたがって自分の研究個室を選んだ。それからチャーターしたバスで月岡温泉のホテル泉慶に行き、祝賀と懇談のひと時を持った。

## 10. 最初の入学試験

新設大学の学生募集は設置認可が出るまでは一切してはならないというきまりであった。もちろん認可が下りることを前提にして計画し、認可が下り次第、募集に取掛かった。学生募集のパンフレット作りでは仙沢室長が指導性を発揮した。彼は写真家でもあったので、夜明けがたに空を飛ぶ白鳥の見事な写真を撮り、若者たちが大学に来て人生の飛翔に備えるべきことを暗示する文句を考案した。敬和学園大学は英語英米文学科と国際文化学科、それぞれ100人ずつ、計200人が入学定員である。まず明けて1991年1月19日に

敬和学園高校から推薦された47人に対する小論文、英語、面接の試験を実施した。面接委員は小淵、春名、高橋の三理事と北垣学長が務めた。一般の推薦入試は1月27日に行った。大学の校舎はまだすっかり完成していないため、キャンパスで入試をすることができなかった。新潟のホテルを試験会場にすることも計画したが、時の新潟南高等学校の校長が親切にも南高校を会場として提供して下さり、助かった。

一般入試は二回に分け、第一次入試を2月12日にホテル新潟で、また第二次入試を国立大学入試の終了後である3月18日に行った。この第二次入試は新発田の本学で行うことができた。

その結果を数字で示すと次のようになる。

	志願者	合格者	入学手続き者
推薦入試	218	146	145
1次入試	248	179	148
2次入試	143	30	23
計	609	355	316

志願者825との見込みは少し甘すぎ、結局609人の志願者を得た。試験の結果316人の入学生を迎えることになったが、さらにこれを学科別、男女別、県内・県外別に分類してみると、次のようになる。

		男	女	県内	県外
英語英米文学科	143	76	67	109	34
国際文化学科	173	117	56	124	49
計	316	193	123	233	83

なお、推薦入学のうち47人は敬和学園高等学校からの入学者だった。それに一般入試で合格した2人を加えた49人の同校卒業生を、学科別、男女別に取った統計をも掲げておく。

	男	女	計
英語英米文学科	3	9	12
国際文化学科	18	19	37
計	21	28	49

当時は断然国際文化学科の名声が高く、それが志願者数に反映していた。国際文化学科とは何を学ぶところであるのか、そのことは大学自体において



も必ずしも明確でなかったが、それでも志願者たちは国際文化学科に入りたがった。英語を不得意とする生徒が国際文化学科に入りたがるのだ、という説もあったが、同学科に入った学生の中には英語が実によくできる学生もいた。しかし200人の入学定員に対して316人の入学は問題であった。たちまちオレンジ・ホールの食堂が満員となった。大学として初めてのことで、「定着率」がどのようになるのかがまったくわからなかったとはいえ、仙沢室長は大学の経済基盤を強化することをねらって、合格者を増やすことを強く主張した。確かに初年度の316人は大学を経営的にうるおしたといえるが、文部省からは厳しい注意を受け、善後策を講じることを余儀なくされた。

敬和学園大学はこのようにして1991年4月の開学を迎えた。明治の初期に T. A. Palm の伝えたキリスト教信仰が芽生え育ち、下越地域の教会形成をうながした。それをアメリカン・ボードが受け継いで拡大をはかり、その中でキリスト教主義の新潟女学校と北越学館という教育機関が誕生したが、それは僅か6年間の生命に終わった。しかしこの地域でのキリスト教主義教育への夢と希望は消えることなく20世紀後半にまで持続して生き延び、ついに1968年の敬和学園高等学校の誕生となって復活した。1991年の敬和学園大学はキリスト教主義高等教育へのヴィジョンの開花であった。しかもそれは新発田市、聖籠町による四年制大学の誘致というかたちで実現した。それから早くも13年が過ぎたのであるが、敬和学園大学の完成はやはり、新島襄が同志社について述べたように、200年後を期さねばならないであろう。次号では、大学の最初の4年間の歩みを描写したいと願っている。